

## 審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1261 号	氏名	武藤 礼治
審査担当者	主査	矢野 博久	(印)
	副主査	尾藤 宏司	(印)
	副主査	秋葉 純	(印)
主論文題目： Epidemiology and secular trends of malignant lymphoma in Japan: Analysis of 9426 cases according to the World Health Organization classification (日本における悪性リンパ腫の疫学と経年変化：WHO 分類に沿った 9426 例の分析)			

### 審査結果の要旨 (意見)

日本国民の死因の 1 位は悪性新生物であるが、各種悪性腫瘍の罹患数・死亡数は経年的に変化している。今回、2007 年から 2014 年までに悪性リンパ腫と診断された 9426 症例を用いて悪性リンパ腫の各種病型の頻度を地理的に解析し、更に発症年齢や各種病型の頻度を経年的にも解析している。その結果、濾胞性リンパ腫やメソトレキセート関連リンパ増殖性疾患が増加し、濾胞性リンパ腫やびまん性大細胞性リンパ腫の発症年齢が上昇している事などを初めて明らかにした。本研究は、極めて多数の悪性リンパ腫症例の解析結果で、他施設では施行困難な研究であり、日本における悪性リンパ腫の動向を知る事の出来る貴重な研究であることから、学位論文として相応しい研究と判断する。

### 論文要旨

日本全国のクリニック・病院から診断のために提出された悪性リンパ腫の症例を用いて悪性リンパ腫の疫学や、その経年変化の概要を示した。2007 年から 2014 年にかけて久留米大学病理学講座で診断した 9426 例の症例を分析した結果、濾胞性リンパ腫とメソトレキセート関連リンパ増殖性疾患の割合が、この期間内に増加していることを示した。また、濾胞性リンパ腫 (FL) とびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) の発症年齢も高齢化していることがわかった。FL と DLBCL のいずれにおいても、統計学的な有意差が示された (女性の DLBCL では  $p=0.0448$  であったが、その他ではいずれも  $P<0.0001$  であった)。

本研究は疫学的な研究であり、これらの原因については明らかにはできなかったが、これらの原因究明のために更なる研究が必要であると考えられる。